

『風に紅葉』注解 (三)

二五 男主人公と異母兄権中納言の遺児若君との対面

松の下枝を洗ふ白波、入海に作りかけたる釣殿、まことに心すごし。公卿の座と思しき所の御簾捲き上げて、ながめおはするに、ありつる男、奥の障子を開けて、御殿油参らせたる方を見やり給へば、限りなううつくしげなる女のささやかなるぞ居たる。いと覚えなくて、近く寄りて見給へば、十一、二ばかりなる人の、白き衣に袴長やかに着て、髪の裾は扇を広げたらんやうにをかしげにて、容貌もここはとおぼゆる所なく、一つづつうつくしなどもなのめならず。さるは、我が御鏡の影、女御などにぞおぼえきこえたる。「覚えなきわざかな」とて、御髪かきやりなどし給ふに、この男立ち去らず、畏まりて居て申すやう、「これは殿下の御嫡子、中納言殿と聞こえさせ給ひし、御後にとどめ置きたてまつらせ給へる若君になんおはします。なにがしが一腹の姉に、兵衛督と申しはべりけるが女、中納言の君とてかの御方に候ひはべりしが、御名残をとどめて亡せ給ひて後に、生まれ給へるになんおはします。中納言殿の母上おはせましかば申しはべりなまし。御忌だに過ぎぬほどに競ひ隠れ給ひにしに、また、この君生みきこえて、ほどなくそれも亡せはべりにしかば、母にてはべりしが、

ほどなき袖に玉を包みたらん心地にて、もていたつききこえしも、一昨年亡せはべりにし後は、ただなにがしが身一つにもて扱ひたてまつりてなん。ことのさまもと思ひ給へて、ただ女房の御さまにてなんあらせたまつる。『いかなる便りもがな。このよし奏しはべらん』と、御社にても祈誓し申しはべりつるに、かかることを待ちつけたてまつりて、喜びながらなんとて、うち泣く。ことのさまといひ、この君のあはれげさなどに、君も涙押し拭ひ給ふ。みづからも涙を浮けて、恥づかしげに思ひて側みたり。なか同胞などのなかりけん、とことの折節は口惜しうおぼゆるを、いみじう嬉し、と思す。「中納言のと言へば、なほ隔たりたるに、ただ殿の御子となん披露すべき。さ心得て」とて、かき撫でつつ、うつくし、と思したるを、いみじう嬉し、と見たり。「この御母宮の心狭くて、中納言殿も、母上も、その嘆きに耐へず、亡せ給ひにけり。あな恐ろし。聞こえてよきことあらじ」と人のおどしけるゆゑに、申し出でんことをためらひけるに、この御気色を見きこゆるには、例の世の人の思ひつけごとを言ひけるこそ、嬉しう思ひをりける。

大倉 比呂志

【語釈】

* 松の下枝を洗ふ白波―「沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波」沖の方では風が吹いたらしい。そのため、住吉の岸辺の松の下枝を白波が洗っている（後拾遺集・雑四・一〇六三・民部卿経信）に拠る。* 入海に作りかけたる釣殿―辛島Aは『住吉物語』の主人公が姫君と住吉で邂逅する条に、「海の入江に造りかけた家の、ものさびしげなるに」（成田図書館本）とある。* 公卿の座―貴人用の客間。* ありつる男―社の（そうくわん）。* 奥の障子を開けて、御殿油参らせたる方を見やり給へば、（我が御鏡の影、女御などにぞおぼえきこえたる―辛島Aは『恋路ゆかしき大将』巻三で、端山が梅津の女別当の妹尼の二人の娘を紹介されるくだりと酷似する）と指摘する。ちなみにその個所は、「しばしありて中の障子を開けたるに、美しき女房の、目も驚かるばかりなる、二人ゐたり。寄りて見給へば、一人はなほ少し側むさまなるに、いま一人ぞ御妹なるべき、気高う心恥づかしきをもととして、まみのわたり、ふと我が御鏡の影、中納言などふと思ひ出でられて、気高うよしあるさま、あさましまで驚かれ給ふ」とある。* 十一、二ばかりなる人の、白き衣に袴長やかに着て、髪のはげをを広げたらんやうにをかしげにて―ここは『源氏物語』若紫巻に、「十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、……髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして」と語られている紫上の描写と類似する。紫上が光源氏に略奪され、養育されて寵愛されたように、遣児若君（男君の異母兄で故権中納言の息子で、男君の甥に当たる。三位中将・宰相・中納言兼右大将と官職は異動するが、本文でこの若君の官職が明示されて語られている場合を除いては、遣児若君と称する）も男君に引き取られ、同性愛の対象となって寵愛される。このよう

に紫上の影響が大きい。なお、辛島Aは「御髪も、これ（私云、男装姫君）は長さこそ劣りたれ、裾などは扇を広げたらんやうにて、丈に少しはづれたるほどにこぼれかかれる様体、頭つきなど」（とりかへばや・巻二）をあげる。ちなみに、『とりかへばや』（巻一）に女装男君に関して、「物語に扇を広げたるなどこちたく言ひたるほどにはあらで」とあるように、辛島Aは『夜の寝覚』など、『源氏物語』以後の物語では、身の丈に余る長い髪についても、扇を広げたような、という形容を用いるようになる」と指摘している。* ここはとおぼゆる所―欠点。* 女御―男君の妹の宣耀殿女御。* 殿下の御嫡子―「殿下」は男君の父関白。辛島Aは「故中納言を「御嫡子」とする裏には、大将は嫡子と認められないとの認識が伏在するであろう」という。* 一腹の姉―社の（そうくわん）と同母の姉である中納言の君（兵衛督女）。遣児若君の母親。* かの御方―故権中納言。* 御名残をとどめて亡せ給ひて後に―権中納言が胤を残して、お亡くなりになった後。* 御忌―権中納言の服喪。* 競ひ隠れ給ひにしに―主語は権中納言の母親。* この君―遣児若君。* それ―中納言の君。* 母にてはべりしが―社の（そうくわん）の母親。* ほどなき袖に玉を包みたらん心地にて、もていたつききこえしも―「ほどなき」は卑しいの意味。遣児若君を大切に育てたこと。辛島Aは参考として、「（葵上ハ）たぐひおはせぬをだにさうざうしく（母宮ハ）思しつるに、袖の上の玉の砕けたりけむよりもあさましげなり」（源氏物語・葵）、「袖の上に珠を握らたらん心地にてもてなしたてまつり給へるさまを」（恋路ゆかしき大将・巻二）をあげる。* ことのさま―辛島Aは「死んだ中納言に男子のあったことが知れると、関白家の後継者争いの火種となるかもしれない、などということ懸念したか」と推測する。* 女房―女。* この君―遣児若君。* 君

―男君。 *みづから―遺児若君自身。 *同胞―辛島Aは「男きようだいに限定していっているであろう」という。 *中納言のと言へば、なほ隔たりたるに―男君と遺児若君とは、叔父と甥の關係だから。 *殿―男君の父関白。 *見あたり―主語は社の〈そうくわん〉。 *その嘆きに耐へず、亡せ給ひにけり―辛島Aは「具体性を欠く表現であるが、夫の愛情を頼むあまりに、先妻方への心ないしうちの出てくることもあったものか」という。 *あな恐ろし―全集はここから会話文とする。 *嬉しう思ひをりける―辛島Aは「嬉しう」の上に「と」を補う。

【訳文】

松の下枝を洗う白波、入り海に面して造つてある釣殿は、本当に物寂しい。貴人用の客間と思われるところの御簾を捲き上げて、男君が物思いに沈んでいらつしゃると、先程の〈そうくわん〉が奥の障子を開けて、御殿油を差し上げた方角に目をお向けになると、非常に愛らしい女の子で小柄なのが座っている。まったく思いも寄らず、近くに寄つて御覧になると、十一、二歳くらいの人で、白い衣に袴を長い感じにはいて、髪の毛の先の部分は扇を広げたようにかわいらしげであつて、姿もここはと思われるような欠点もなく、ひとつひとつを取り上げてかわいらしいなどという言葉では言い表わせないほどである。その上、女の子は鏡に映し出される男君自身の姿や妹の宣耀殿女御などに似ている。「思いも寄らないことだ」と言つて、その女の子の御髪を手でかき払いなどなされると、先程の男は立ち去らず、正座して申すには、「これは関白の御嫡子で、中納言殿と申し上げなされた方が、お亡くなりになった後にお残し申し上げなされた若君でいらつしゃいます。私の同腹の姉で、兵衛督と申しました人の娘は、中納

言の君といつて中納言殿のお屋敷にお仕えしていましたが、中納言が御胤を残してお亡くなりになった後に、若君はお生まれになったのです。中納言殿の母親が生きていらつしゃつたら、この若君のことは申し上げたでしょう。中納言の御服喪期間さえも過ぎないうちに母上が先を争うようにお亡くなりになり、また、この若君を生み申した後、間もなく中納言の君が亡くなりましたので、私の母に当たります者が、卑しい自分の袖に寶石をくるむような気持ちで、大切にお世話申し上げたが、一昨年亡くなりました後は、ひたすら私が自分ひとりでお世話申し上げます。諸事情も考慮しまして、ともかく女の姿で暮らせ申し上げています。『どのような機会でもいいから、あればなあ。この事情を申し上げましょう』と御社にも祈願申し上げましたところ、このような縁を手に入れ申して、喜んでおられます」と言つて、泣く。事情といい、この遺児若君のかわいらしさなどに、男君も涙をぬぐいなさる。遺児若君自身も涙を浮かべて、きまり悪そうに思つて横を向いている。男君はどうして自分には男兄弟がいなかったのだろう、と何かの折には残念に思つていたので、本当に嬉しい、とお思ひになる。「中納言の子というつと、やはり疎遠な關係になるから、ただ関白の御子としておひろめしよう。そのように承知しておいて」と言つて、遺児若君の髪をかき撫でて、かわい、とお思ひになつてゐるのを、非常に嬉しい、と〈そうくわん〉は思つて見ている。「男君の御母宮の御心が狭くて、中納言殿も、その母上も、母宮のやり方に耐えられずにお亡くなりになつたのだ。ああ、恐ろしい。若君のことが母宮の耳に入つたら良いことはないだろう」と人がおどしたので、〈そうくわん〉も申し出ることをためらつていたが、男君のこの御様子を拝見すると、いつものように世間の人がいい加減なことを言つていたのだった、と嬉しく思つていた。

【考察】

『栄花物語』巻三十八(松のしづえ)において、後三条院が天王寺と石清水に参詣後、住吉に詣で、左大弁経信が「沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白浪」(訳は【語釈】に記載済み。「延久五年(一〇七三)三月に住吉に参らせ給ひて、歸さに詠ませ給ひける」の詞書で『後拾遺集』に所収された二首のうちの後の歌(私云、前の一首は後三条院歌)を詠歌したと記されている。ちなみに、この歌は『古今著聞集』(巻五・和歌第六・一七〇)にあり、「当座の秀歌なりけり」と記されている(『十訓抄』(第一〇・五)にも「当座の秀歌なり」とある)。また、因幡守忠季の歌「色ことに今日は見えけり住の江の松の下枝にかかる白浪」今日の色も格別に見えたことだ。住の江の松の下枝にかかる白浪は」が記され、『栄花物語詳解』下(明治書院 一九〇七・一)に「巻の名、此歌より出でたり」と論評されている(ただし、初句を「色ごと」とする)。これらの二首が二五節の冒頭「松の下枝を洗ふ白波、入海に造りかけたる釣殿、まことに心すごし」の傍線部に影響を及ぼしたものと考えられる。

ところで、男君は妹の宣耀殿女御(後に弘徽殿中宮)が二度目の懐妊で衰弱したので、唐から帰国した効験のある聖に祈禱を依頼するために難波に赴いた際、亡き兄の遺児若君に出会った際の印象は、

⑥限りなうつくしげなる女のささやかなるぞ居たる。いと覚えなくて、近く寄りて見給へば、十一、二ばかりなる人の、白き衣に袴長やかに着て、髪は扇を広げたらんやうにかしげにて、容貌もここはおぼゆる所なく、一つづつうつくしなどもなめならず。さるは、我が御鏡の影、女御などにぞおぼえきこえたる。

と語られ、男君は遺児若君と同姓愛に耽った後、都に連れ帰ることになる。ちなみに『源氏物語』若紫巻において、光源氏は瘧病の加持祈禱を施してもらうために、お忍びで北山の聖のもとを訪れるわけだが、そこで小柴垣のある瀟洒な建物を垣間見た際の描写は、

⑦きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

とあり、光源氏は紫上に釘付けとなる。引用文⑥⑦の傍線部における遺児若君と紫上とに関する類似的表現により、紫上の描写が遺児若君のそれに影響を及ぼしていると考えられる。その後、光源氏は紫上の祖母尼上に彼女を都に引き取りたい旨を申し入れるが、紫上が幼少だという理由で固辞され、祖母尼君の死後、紫上の父兵部卿宮に引き取られる寸前に、二条院に拉致した結果、「(光源氏ガ)ものよりおはすれば、(紫上ハ)まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りて、いささかうとく恥づかしとも思ひたらず」と語られているのと、『風に紅葉』の『苦しきに、いざ休まん』とて、(男君が遺児若君ヲ)かき抱きて臥し給へば、疎く恐ろしげも思はず、うち笑みてかいつきて寝給へり」とあるのとを比較してみると、光源氏と紫上、男君と遺児若君という二組の人物の交歓風景が類同的に語られている。このように、物語の発端が北山と住吉というほぼ正反対の状況(山と海。都を起点に考えれば、北の方角と南西の方角)で暮らしている人物(紫上と遺児若君)が男主人公(光源氏と男君)に引き取られて溺愛され、

異性愛と同性愛の差異はあるものの、紫上と遺児若君とが成人という通過儀礼がなされていないという共通点もあり、両者の話筋の類似性を見るのである。

また、遺児若君の女装に関して社の〈そうくわん〉が『このことのおさまもと思ひ給へて、ただ女房の御さまにてなんあらせたまつる』と男君に語っている点に注意しておきたい。例えば、『とりかへばや』において若君は女装、姫君は男装をしているわけだが、幼少期の若君は恥ずかしがり屋で、他人に姿を見せることもなく、室内にすることを好んで、「絵かき、雛遊び、貝覆ひなどしたまふ」のとは対照的に、姫君は外遊びを好み、「鞠まり、小弓などをのみもて遊び給

い、人がやって来ると「走り出で給」という状況から、父親は仕方なく表面上は性の交換をしたのである。さらに『有明の別れ』においては、主人公女大將は男子のいない左大臣夫婦に神の啓示により、女性として生まれ、男装の姿で生きていくように仕向けられる。そのために事前に妹として「幻の姫君」を設定しておくわけだが、やがて帝に女大將の実体が見破られ、入内を要請されたので、父親は女大將が死んだことにして、「幻の姫君」（実は女大將）を入内させる。女大將は異装時に〈かくれみの〉という術を用いて懐妊中の対の上を連れて来るわけだが、それは左大臣家の嫡子を獲得するために必要であったのであり、「家を維持するためのもの」（神田龍身「物語史への一視角―『古』と

りかへばや』『在明の別』と『今とりかへばや』―「文学・語学」一〇一号一九八四・４）と考えられよう。このように両作品においては異装せざるをえなかった理由が明確に語られているのに対して、『風に紅葉』では遺児若君が女装させられた理由が明確には語られていないのだ。辛島Aが「死んだ中納言に男子のあったことが知れると、関白家の後継者争いの火

種となるかもしれない、などということ懸念したか」と述べているように、現在のところもっとも説得力に富んでいると思われる。それは異装の意味が、前述の二作品のごとく、主題に関わるような大きな機能を担っていないために明確には語られなかったとも考えられようが、男君の視線からとらえられた梅壺女御や承香殿女御は年増であり、憧憬する一品宮の母中宮は手の届かない存在であることが語られた後に、男君を恋慕した年増たちに対する反比例として年下の美少年を女装させて登場させ、帝から接近が禁じられた憧憬の対象たる中宮の肩代わりを遺児若君に果たさせようとしたのではなからうか。その結果、男君は遺児若君に満足し、男君の分身となるわけだが、美しい遺児若君との男色関係が成立した後、遺児若君との関係を逆転させて、後になって出現する年下で美しい処女の故式部卿宮の姫君との恋が語られたのではなからうか。その姫君は行方不明になってしまったものの、男君にとって彼女との恋は男君主導の異性に対する自発的なそれであった。

さらに、〈そうくわん〉が男君に向かって『一昨年（そうくわん）ノ母親ガ亡せはべりし後は、ただなにがしが身一つに（遺児若君ヲ）もて扱ひたてまつりてなん』と述べているわけだが、遺児若君の面倒は母親の死後には自分が見たのだと強調しており、それは文末に強意の係助詞「なん」が存在することによって理解されよう。では何故〈そうくわん〉は遺児若君を自分が養育したと語ったのか。それには遺児若君が今を時めく関白の孫であり、男君の甥であることが関わっているよう。〈そうくわん〉がそのような立場にある遺児若君のことを述べることにより、〈そうくわん〉の背後における関白並びに男君の存在を顕在化させ、それが周囲に伝播することを期待して、遺児若君の安泰と、住吉神社における〈そうくわん〉自

身の地位の安泰と上昇を計ろうとしたのではないのか。とすれば、へそくわんへにとって男君の来訪は一石二鳥の効果を發揮するものだったのではなからうか。

二六 男主人公と遺児若君との同性愛

* さらでだに、稚児ちごをば見過ぐしがたう思したる御心地に、「苦しきに、いざ休まん」とて、かき抱いだきて臥ふし給へば、疎そとく恐ろしげも思はず、うち笑わらみてかいつきて寝給へり。「夜は誰とか寝給ふ」とのたまへば、「尼上にじょうとこそ寝しかど、その後は一人こそ。顔かほのよからぬ人とは寝たくもなき」とのたまふ声、いとうつくしげなり。身なりなど磨みがけるやうなる手触てふり、女めのさまよりもをかしげなり。

② 住吉すけよしの神のしるしの嬉うれしさも君をみるめに思ひ知られて

と聞こえ給へば、

② かけりける神のしるしを知らずしてかひもなきさと思ひけるかな

【語釈】

* さらでだに、稚児をば見過ぐしがたう思したる御心地に—辛島Aは「たんに子ども好きというのではなく、同性愛の対象として少年を愛好する性癖がある、ということであろう」と述べる。* 疎く恐ろしげも思はず—遺児若君が男君を。* 尼上—社のへそくわん・中納言の君の母親。尼上は遺児若君には祖母に当たる。* その後は—尼上の死後は。* 顔のよからぬ人とは寝たくもなき—辛島Aは「無邪気で子どもらしい返答、というより、傲慢で鼻もちならない性格がほの見えることばというべきであろう」という。* 手触り—辛島Aは「人の肌の感触を直叙する傾向

は『狭衣物語』あたりから顕著になる」と指摘する。* 女のさまよりもをかしげなり—辛島Aは「大将が同性愛関係を結ぶのも当然との含み」という。* ①「住吉の」の歌—男君の歌。「みるめ」に「見る目」と「海松布」とを掛ける。* ②「かけりける」の歌—遺児若君の歌。「かひ」に「貝」と「効」、「なきさ」に「渚」と「無き」とを掛ける。

【訳文】

そうでなくてさえ、稚児を見過ぐしがたく思っていらいらっしゃる男君の御気持ちとして、「苦しいから、さあ休もう」と言って、遺児若君をかき抱いて横におなりになると、遺児若君にとってはよく知らない人だが、恐ろしいとも思わず、ほほ笑んでしがみついてお休みになった。「夜は誰とお休みになるの」とおっしゃると、「尼上と寝ていたけれど、尼上が亡くなってからは一人で寝るのだよ。顔の良くない人とは寝たくもないよ」とおっしゃる声は、本当にかわいらしい。体つきなど、磨いたような手触わりは、女の様子よりも魅力的である。

② 住吉の神の靈験のありがたさも、あなたと出会ったことと思ひ知らされました。

と申し上げなされると、

② これほどの神の靈験も知らずに、ここは何のかいも無い渚だと思ひいたことです。

二七 男主人公、遺児若君を伴って帰京

* 異事いじなく戯たはぶれおはするに、民部卿ことごとしげにて、御車参ごぐるまらせたるよし聞こゆれば、出で給ふにも、この君をば女のやうに引き側そばめて、乗せき

こえ給ふ。ほどなく綱手速く曳かせて、夕つ方、都に着き給ひぬ。

殿は、御心も空に待ちきこえ給ひけるに、「かの聖まづ占ひて、けしうはおはしますまじきよし申しはべり」と聞こえ給ふを、神仏の仰せなどのやうに思したり。女宮のいかにならはず思しつらん、とまづ御心も空なれど、この人をいつしか手も放ち給はで、「かかる人をなん儲けてはべる」とて、見せきこえ給ふ。「女とて御心や置く」と聞こえ給ふに、げによく見れば、男子からと見ゆる顔つきなるもあやし、とほほ笑ませ給へるも、をかしげなる御さまなれば、まづさし寄りて、細やかに語らひきこえ給ふ。

②③君と見ぬ難波の浦はかひなくて返る波路の急がれしかな

②④心のみ難波の浦に行き返りおぼつかなさをも嘆きて

しどけなう言ひ消ち給へる御気色、有様など、中宮の御気配に一つものやうなり、女御の御方へ、「女を儲けてはべり。御装ひ一領」と聞こえ給へれば、女郎花に紅の御単衣、二藍の御小桂奉り給へるを、着せ替へたてまつりて、殿の御方へ率てたてまつり給へり。大臣もさすがうち見たてまつり給ひて、いみじう泣き給ふ。「これははるかに故中納言よりは清らにこそ見ゆれ」とて、いみじうあはれと思いたり。弁といふ人を御乳母につけて、「夜もそれと寝給へよ」と仰せらるれば、伏し目になりて、「御側ならずは、ただ一人寝ん」とのたまふ心苦しさに、また、「さらば、いざ」とて、宮の御側へも具しきこえ給ふ。終の果ていかがあらん。例のささしかるらん。この冊子のと。

【語釈】

* 異事なく戯れおはするに―男君と遺児若君とが同性愛に耽っている状況。 * 引き側めて―引き寄せて。 * 殿は、御心も空に待ちきこえ給ひけ

るに―「殿」は父関白。関白は心配のあまり放心状態の体で、男君の帰りを待っていること。 * 女宮のいかにならはず思しつらん―男君が聖を招請するために都を離れたので、一品宮が一人寝を余儀なくされたこと。

* この人―遺児若君。 * 女とて御心や置く―遺児若君が女だということ
で、焼きもちを焼くかと男君が一品宮をからかう。 * ほほ笑ませ給へるも―一品宮の当惑した様子。 * まづさし寄りて―主語は男君。 * ②③君と見ぬ」の歌―男君の歌。「かひ」に「貝」と「効」とを掛ける。 * ②④「心のみ」の歌―一品宮の歌。辛島Aは「二人の贈答は、『恋路ゆかしき大将』巻三で、梅津から戻った端山が一品宮と語らう場面での贈答とよく似ている」と指摘し、「このほど、神事などうち続き、(一品宮ト)隔たりつる日数思ふに、千代しも経たらん心地して、(端山ハ一品宮ノモトニ)急ぎ渡り給へれば、(二品宮ハ)何心なう今はうちとけてうち頼み、懐かしき御気配、また初めて見つけたらん人のやうに珍らし。『逢ひ見んと祈りし神に向かひても立ち帰るさの急がるるかな(〓あなたにお逢いしたいとお祈りした神に向かひても、早く引き返した、と帰り道が急がれたことです)／同じ心にも待たせ給はじ』など(端山ガ)聞こえ給へば、『見えぬ間は旅の空なる心地して待ちわたりつるほどぞはるけき(〓あなたがいらっしゃらない間は私も旅をしているような上の空の気持ちで、あなたを待ち続けている間、本当に長く感じました)』。ありつることども、女別当のさま変はりたるあはれなど、まづ語りきこえ給ふ」の個所をあげる。 * 中宮―一品宮の母親。 * 女御―妹の宣耀殿女御。 * 一領―ひとそろい。 * 殿の御方へ率てたてまつり給へり―父関白のもとに遺児若君を。 * これ―遺児若君。 * それ―遺児若君の乳母となった弁という人。 * 御側―男君の御側。 * 宮の御側へも具しきこえ給ふ―「宮」は一品宮。桐壺帝が光源氏

を藤壺の所へ連れて行った結果、後に二人の密通を招来したのと同じ運命を辿る伏線。*終の果ていかがあらん。例のささしかるらん。この冊子のと—いつものように性的に爛れた結果をもたらすのではないかということを提示して、読者に興味を抱かせようとする草子地。

【訳文】

二人は脇目も振らず男色に耽っていらっしやると、民部卿が仰々しく、御車を差し上げた旨を申し上げるので、御出発になる時も、この遣児若君を女のように側に引き寄せて、車にお乗せ申し上げなさる。間もなく綱手を早く引かせて、夕方、都に到着なされた。

関白は、御心も上の空で男君の帰りをお待ち申し上げなされていたが、「あの聖が真っ先に占って、悪くはいらっしやらないであろう旨を申しました」と申し上げなさるのを、関白は神仏の御託宣などのお思いになされた。一品宮は不慣れな一人寝をどのようにお思いだったのだろうか、と男君は実に御心も落ち着かないけれど、いつになってもずっとこの遣児若君の手もお離しにならず、「このような人をさずかったですよ」と言って、お見せ申し上げなさる。「女だということでも用心なさいますか」と申し上げなさるので、なるほどよく見れば、男の子のように見える顔つきも不審だ、と一品宮が困ったような笑みを浮かべていらっしやるのも、すばらしい御様子なので、男君は真っ先に近寄って、ねんごろにお話し申し上げなさる。

㉓あなたと一緒に見ない難波の浦はかいもなく、帰り道が急がれたことで。

㉔心だけは難波の浦を往復していました。あなたのことが心配で私も嘆いていました。

取りつくろわず控え目におっしやった御様子や態度などは、一品宮の母親中宮と同じものようである。宣耀殿女御の御もとに「娘をさずかりました。御衣装をひとそろい下さい。」と申し上げなされると、女郎花に紅の御単衣、二藍の小桂を差し上げなされたので、遣児若君を着せ替え申し上げて、関白の御部屋に引き連れ申し上げなされた。関白もそのままにしてはいられず、遣児若君を拝見なされて、ひどくお泣きになる。「この子は亡き中納言よりもずっと美しく見える」と言って、ひどくいいとお思っている。弁という人を御乳母につけて、「夜もこの弁とお休みなさいよ」とおっしやると、遣児若君は伏し目になって、「男君の御側でなければ、一人だけで寝たい」とおっしやるのが気の毒なので、また、「それなら、さあ」と言って、一品宮の御側にもお連れ申し上げなさる。最後にはどのようなになるのだろうか。いつものように乱りがわしいことだろう。この冊子の場合には。

二八 聖の効験により、宣耀殿女御、皇子を出産

*かくて、民部卿の二郎、左衛門佐といふを、聖の迎へに遣はす。煩ひなく参れり。二、三日加持など参るに、御心地次第に軽くならせ給ひて、七、八日になれば、もとの御心地なるに、誰も世の常に思さんやは。春宮よりも、「いかにいかに」と時の間に行き帰る御使ひの、「かかること」と聞かせ給はん嬉しさばかりだにいかかはあらんに、また若宮にて生まれさせ給へり。内裏よりも、いかなる大僧正にも、望みに従ふべく仰せらるれど、
*「老僧などのさるべきか。望みにくたびれ、妄念残りはべらん。それを代

はりになさせ給へ」とぞ申しける。

【語釈】

*かくて—前節を「この草子の」で終わり、本節を「とかくて」から始めると解する考え方（全集）もある。*加持—真言密教で行う呪法。手で印を結び、金剛杵こんどうしよを握り、陀羅尼だらにを唱えて物事を清め、願いがかなうように仏に祈り、物の怪を追い払う。*御心地—宣耀殿女御の。*かかること—宣耀殿の平癒。*さるべきか—全集は「さるべきが」とする。

【訳文】

このように、民部卿の次男の左衛門督という人を、聖の迎えに遣わした。聖はためらうことなく参上した。二、三日加持などをして差し上げると、宣耀殿女御の御気分は次第に軽やかにおなりになって、七、八日になると、以前の御様子になったので、誰も普通のこととお思いになるはずはない。春宮からも「具合はどうだ、どうだ」と少しの間にも往復する御使いに尋ね、その御使いが「このようでございます」と申し上げたのを聞きになった嬉しさでさえどれほどだったのかしれないのに、その上、若宮がお生まれになった。内裏からも、どのような大僧正にも、希望に応じようと仰せになるが、「私のような老僧がそれにふさわしいのでしょうか。希望に疲れて、よくない執着が残ることでしょう。誰かを私の代わりになさって下さい」と申し上げた。

二九 聖、男主人公への忠告を残して、修行に出発

その後、三日ばかり加持参りて、積み置かれたる祿どもさながら置きて、

暁、逃げて往にけり。大将殿の御方なる人の名を上書きにしたる文を、一つ書き置きたるに、「なほ行ふべき所々侍れば、急ぎまかり出づるになん。今四、五年のほどに、君の限りなき御慎みつしに見え給ふ。そのほどに参りはべらん。いづくの浦にても御祈りは怠るまじくなん」とて、月日、名のり書きかて判したり。君はうち返し御覧じて、飽かずいみじ、と思す。祿どもの上に折紙書きて、

②身みになるる苔こけの衣のほかにまた重ね袖のおぼほえぬかな

住吉より人参りて、「かの聖、『今は御喜ひしびなり』とて出ではべりしかば、もし、なほ御尋ねもや侍らんとて、人をつけて見せおかせはべりしかば、『煩わづらはしく何かにつきて見る。帰れ』と申しはべりけれど、芦屋あしやの里、布引ふびきの滝たきなうち過ぎて、紀きの川といふ所より舟に乗りはべりにければ、力なくて帰りたる」となん申す」と聞こえたり。

【語釈】

*積み置かれたる祿どもさながら置きて—辛島Aは「このあたりの聖のたった態度は、『恋路ゆかしき大将』巻五で、物の怪に苦しめられ難産に喘ぐ二品の宮を救った無言の聖のたった態度と、通ずるものがある」として、「かかる紛れに、無言の聖はかき消ちて見えず。いかなる祿をいかさまにと思しつるに、かひ無ければ、急ぎ戸無瀬へ尋ねたてまつれば、いとさりげなくてぞ候ひける。『祿も喜びもさらにかひ侍らじ。さもあらば、ここをさへ疎みはべりなん』と入道大殿聞こえ返し給へば、飽かず誰も思す」をあげる。*怠るまじくなん—「怠る」と「まじく」の間に「きこゆ」の傍書あり。そこで「怠る」は「怠り」の誤記と見て、「怠りきこゆまじくなん」と改訂する考え方（辛島A）もある。*判したり—花押かお（署名の

下に書くしるし。*②「身になるる」の歌―「苔の衣」は僧衣。新たな僧衣はいらないという意味。*申しはべりけれど―主語は聖。*芦屋の里、布引の滝―ともに撰津国。*紀の川―紀伊国。

【訳文】

その後、聖は三日ほど加持をして差し上げて、積み置かれた緑などもそのまま置いて、暁、逃げて行ってしまった。大将殿の御もとにいる人の名を上書きした文を、一通書き置いてあったが、「まだ修行すべき多くの所がありますので、急いでおいとま致します。もう四、五年のうちに、男君にはこの上ない御忌みがあると見えになります。その時にうかがいましょう。どこの浦にいても御祈りは怠らないつもりです」と書いて、月日と名前を記して花押がある。男君は何度も御覧になり、心残りで悲しいとお思になる。緑などの上に折紙に書いて、

②我が身にとって着慣れた僧衣以外にその上に衣を重ねようとは思われません。

住吉から人が参上して、「あの聖は、『今は宣耀殿が平癒されて喜ばしいことだ』と言って出て行きましたので、ひょっとして男君からお尋ねがあるかもしれないと存じまして、人をつけてその行方を見させておきましたところ、『面倒だ。どうして後について来るのか。帰れ』と申しましたが、芦屋の里、布引の滝などを過ぎて、紀の川という所から舟に乗りましたので、どうしようもなく帰って来ました」と申しましたと申し上げた。

三〇 弁の乳母の結婚騒動

「式部大輔といふ文章博士なりける末の子にて、世に経るたづきなかり

けるを育みおきて、若君に文など習はしきこえさせけるが、捨てられたてまつりて泣き悲しむ、* 拝ませきこえん」とて、具して参りたるよし聞こゆ。大将召し出でて見給へば、少しをこびたる景気なれど、「さやうの者はさこそあれ。わざとも大切のことなり。やがて候ふべし」とて、さるべく仰せ給へば、涙を流して嬉しく思ひたり。若君もさすがうち笑みて、嬉しげに思したるもあはれにて、弁の乳母が男、亡せにしにひき合はせんよ、と思して、弁を召して、領すべき所の下文をさし入れ給ひて、小侍のあるに、「ここ、内より開けられぬやうにせよ」とのたまへば、打ちつけがはめかす音かしまし。なべてはかかる御計らひの嚴重さもはしたなかるべきを、さる面なき弁なれば、朝参りて、「いかにも御計らひを否びはべるまじきに、けしからず」と申せば、「いざとよ。古の頼もし人はさしも容貌のよかりしに、あまり劣りたれば受け取らじと思ひて、逃がさじとてよ。かまへてこの人の御後見、真心にせよ。大方の乳母は、左大弁にてなんあるべき」など、この御扱ひよりほかのことなし。

【語釈】

*式部大輔―底本は「民部大輔」だが、文章博士とある点から見て、「式部大輔」と判断し改める。なお、「式部大輔……拝ませきこえん」を辛島Aと全集は地の文とする。*世に経るたづき―生活の手段。*若君―遺児若君。*捨てられたてまつりて泣き悲しむ―末子が失職したのは、遺児若君が都に連れて来られたことに起因するか。全集は「尼君（私云、社のへそうくわん）の母親で、遺児若君を養育していた尼君」の死後」失職したとする。*拝ませきこえん―遺児若君を。*さやうの者はさこそあれ―学者というものは、愚鈍そうに見えても仕方がない。*男―夫。*ひき

合はせんよ―遺児若君に学問を教えていた男と結婚させよう。*弁を召して―主語は男君。*領すべき所の下文―「下文」とは領地として所有できる土地を記した文書であるが、男君から弁の乳母に贈られた結婚祝い。男君が遺児若君の学問係の男を弁の乳母と無理矢理に結婚させようとする代償であると考えられる。*ここ、内より開けられぬやうにせよ―辛島Aは「弁が男を嫌って逃げ出せないように、との魂胆」という。*がはめかす―ガタガタと大きな音を立てる。*いさとよ―いえね。辛島Aは「弁の劍幕を軽く受け流して、とぼける」という。*古の頼もし人―弁の乳母の死んだ前夫。*あまり劣りたれば―男の容貌が。*この人―遺児若君。*左大弁―辛島Aは「左大弁」は、弁を、弁官の最高位者に見立てて呼んだもの。ご機嫌とりをしているのである」という。ちなみに、桐壺帝は光源氏の将来を占ってもらうために、高麗人の相人のもとに「御後見だちて仕うまつる右大弁の子のやうに思はせて率てたてまつる」（桐壺巻）とある「右大弁」よりも上位に位置する「左大弁」を男君が使ったのは、男を弁の乳母と結婚させようとして彼女に不快な思いをさせたので、土地を贈与するとともに、一種のおわびの意を込めて、弁官の最高位を用いたか。

【訳文】

「式部大輔という文章博士であった末の子で、生活する手段のなかった人を尼君が世話をして、遺児若君に学問などをお教え申し上げさせていたが、遺児若君が都に行ったために、末子は失職させられ申して泣き悲しんでいるので、遺児若君に拝謁させよう」と言って、連れて参った旨を申し上げる。大将がお呼び出しになって御覧になると、末子は少々愚かな様子

だが、「学者というものは愚鈍そうに見えても仕方がない。学問はとりわけ重要なものだ。このまま遺児若君にお任せよ」と、男君がしかるべく仰せになったので、末子は涙を流して嬉しいと思っている。遺児若君もやはりほほ笑みなさって、嬉しく思いなのも男君はいとしくて、弁の乳母の夫が亡くなったので、この末子と結婚させようとお思いになって、弁をお呼びになり、領地として所有できる場所を記した公文書を弁の部屋に差し入れなさって、そこにいる小侍に、「この部屋を中から開けられないやうにせよ」とおっしゃったので、戸を打ちつけてガタガタする音がやましい。普通ならこのような御取り扱いの嚴重さも体裁が悪いものだが、あれほど厚かましい弁なので、翌朝参上して、「いずれにしても御取り扱いを拒むことはできませんのに、なさり方は感心できません」と申し上げると、「いえね。あなたの昔の夫はあれほどまでに容貌が美しかったのに、今度の男は余りにも醜男だから、あなたが引き受けまいと思つて、逃がすまいとしてしたことだ。心に込めて遺児若君の御世話をするやうに。あなたのように全般的な世話をする乳母は、左大弁でなくてはならぬ」などと、この遺児若君の御取り扱いばかりに心を砕いている。

三一 遺児若君と宣耀殿女御との対面

女御の御産のほどの御いとまなさには、女宮にのみ預けきこえさせ給ひければ、碁打ち、偏へん継けいぎ、何か遊ばしきこえ給ふに心ばせありて、かどかかどかどしうものし給ふを、誰も愛しきこえぬ人なし。

世よの中静まりてぞ女御の御方へ具しきこえて、御覧せさせ給ふ。御さまのうつくしさをこれこれもいみじう愛せさせ給ふ。幼心をんしん地にも、女御の御さまの、日頃人ひぐらにすぐれてうつくしう懐なつかかしと見きこえつる宮みやよりも、なほ目め

もあやなるを、つくづくとまもりきこえ給ふを、大将、をかし、と思して、さし寄りて、「あなたにおはすると、いづれかまさりて見たてまつる」とのたまへば、うち笑みて、「それもよくおはすれど、これはなほ類なくこそ。君に似給へるは、同胞（はらから）な」とのたまふ。いみじう笑ひ給ひつつ、「この人が誰よりもうつくしう思ひきこゆる」と申しはべるは、仲澄（なかつすみ）の侍従がまねやせんずらん。心の末こそ後ろめたけれ。なにがしがやうにくづぼれたる念なしにては、よもあらじ。あまり誇らかすほどに、痴（し）れ者に生（お）ほし立てつとおぼゆる」など、笑ひきこえ給へば、「齒黒（は）めもまだしきに、ことさら御前にてつけさせ給へ。ただ今出でて帰らんまでこれに候（ま）へよ」など、細（こま）かに語らひおき給ひて、出で給ひぬるに、ただ女のやうにてまことにうつくしう、鬨（なぶ）らまほしければ、御手（ごて）作りなどは御手（ごて）づからせさせ給へば、御手（ごて）をばみなねぶりまほし給ふ。「かく性（さが）なくは、今はいろはじ」とて、大納言の君にせさせ給へば、「今はさせじ。御手（ごて）づからせずは泣かんとぞ」とて、大納言の君の手をばへし除（の）け給ふ。「宮仕（みやつか）ひもしならはで、苦し」とて、うち臥（ふ）させ給へば、「さは、我も寝ん」とて、御衣（ごぞ）ひきやりて御側（ごそば）に寝給ふ。「一品宮の御側にても、かく振る舞ふか」とのたまはすれば、「さて大将のおはせぬほどは、さてこそ寝れ」とのたまふ。大納言の君、「大将殿のさておはします折は、いづくにか大殿（おほどの）籠（こも）る」と聞こゆれば、「大将は宮と我とが中（なか）にこそ寝給へ。あち向き給へば恨（うら）むれば、こち向き給ふ」などのたまひるたるを、人々笑ひきこゆ。

【語釈】

* 御産のほどの御いとまなさー辛島Aには「出産後は、当日の産屋の儀式から九夜の産養まで、連日のように行事が続き、大将はそれにかかずらっ

て、若君を相手にする暇がない」とある。* 女宮にのみ預けきこえさせ給ひければー遺児若君を一品宮に。* 偏（ひとへ）継（つぐ）ぎー漢字の旁（つくり）を出し、これに偏を添加した（その逆もある）文字を順次考えさせ、ゆきづまった者を負けとする中古の文学遊戯の一つ。* かどかどしうー機転が利いて利発であつて。* 世の中静まりてぞー宣耀殿女御の出産後における一連の行事が終わってから。* 女御の御方へ具しきこえてー男君が遺児若君を宣耀殿のところへ。* これー宣耀殿。* 宮ー一品宮。* 目もあやなるをー見ている方がまぶしくなるほど美しいのを。* あなたにおはするとーあちらにいらっしゃる一品宮とこちらの宣耀殿とは。* それー一品宮。

* これー宣耀殿。* 君ー男君。* 同胞ー兄弟。全集は姉弟とする。* この人ー遺児若宮。* 仲澄の侍従がまねー『うつほ物語』で同母妹の貴宮を恋慕し、貴宮と春宮との結婚に悶死（もんじ）した仲澄のこと。『狭衣物語』巻一で春宮が狭衣に『仲澄の侍従のまねするなめり』と言っており、『恋路ゆかしき大将』巻五にも、恋路の端山に対する発言『仲澄の侍従をもまねび給はずや』とある。世間には宣耀殿と遺児若君とは姉弟の関係だと公表している。『うつほ物語』の兄妹を姉弟に変換したか。* 心の末こそ後ろめたけれー遺児若君は宣耀殿を憧憬しているので、将来、宣耀殿に恋着するのではないかと不安である。* なにがしがやうにくづぼれたる念なしにては、よもあらじー遺児若君は、自分のように意気地がなく、つまらない人間にはまさかならないだろう。男君の遺児若君に対する不安（直前の注）と賞讃とがない混ぜられているか。* 笑ひきこえ給へばー底本「わらひきこえ給は」を意味が通るように改訂。「笑ひきこえ給ふは」とする説（辛島A）もある。* 齒黒めー辛島Aは「若君にお齒黒をさせるのは、女装しているせいであろうか。あるいは、男性も行うようになった

時代背景によるのであろうか」とする。なお、平安後期頃からは公卿などの男子も元服後はお齒黒をするようになった。『平家物語』(巻九)において熊谷直実に討たれようとする敦盛は、「年十六、七ばかりなるが、薄化粧して、かねぐるなり」と語られている。*これ―宣耀殿の部屋。*眉作り―眉毛を抜いて、黛で眉をかくこと。*御手づから―宣耀殿御自身の手で。*御手をばみなねぶりまはし給ふ―遺児若君が宣耀殿の手をなめ回したのは「変態的行動」(辛島A)には違いないが、将来における遺児若君の女性への行動に対して読者が興味を抱くように目論んでいるのではなからうか。*かく性なくは、今はいろはじ―遺児若君がこれほどまでにいたずらをするのなら、もう関わり合うことはすまい。*大納言の君―宣耀殿付きの女房か。*御手づからせずは泣かんど―辛島Aは遺児若君の「我儘な性格を窺わせる」と指摘する。*大納言の君の手をばへし除け給ふ―同様な状況は、男君が伯父太政大臣から梅見の宴に招待された折、女房が男君に酌をしようとしたところ、北の方がそれをさえぎる件は、「なほ押さへて奉り給ふを」と、北の方が男君に酌をしたと語られている。「へし除く」は押し除けるの意味。なお、この場面の詳細は巻一・三一節の【考察】を参照されたい。*宮仕ひもしならはで、苦し―人の世話をするは慣れていないので、辛い。辛島Aは「若君を相手にするのをやめるための口実」という。*大將は宮と我とが中にこそ寝給へ―俗に言う川の字に寝ることであるが、「一風変わった、三人同衾の痴態」(辛島A)であり、後の遺児若君と一品宮との密通の状況と考えられる。

【訳文】

宣耀殿女御が御産の頃の御暇のない間は、遺児若君を一品宮ばかりにお

預け申し上げなされたので、碁打ち、偏継ぎなど色々遊ばせ申し上げなされると、遺児若君は機転が利いて利発でいらっしゃるので、かわいがり申し上げない人はいない。

御出産の騒がしがおさまって、男君は遺児若君を女御の御もとにお連れ申し上げて、御覧に入れなさる。遺児若君の御様子のかわいらしさを宣耀殿も大そういつくしみなさる。遺児若君は幼心地にも、女御の御様子が普段から人よりすぐれて美しく魅力的だと拝見していた一品宮よりも、宣耀殿はさらにまぶしくなるほど美しいので、じっと見つめ申し上げなさるのを、大將は面白いとお思いいなって、近寄って、「あちらにいらっしゃる一品宮と、どちらが美しいと拝見するの」とおっしゃると、ほほ笑んで、「一品宮も美しくいらっしゃるけれど、宣耀殿はやはり並ぶ者がいないでいらっしゃる。あなたに似ていらっしゃるのは、兄弟だね」とおっしゃる。男君は大そうお笑いになりながら、「遺児若君が宣耀殿は誰よりも美しいとお思い申し上げる」と申しておりますのは、仲澄のまねでもするつもりだろうか。あなたの心の行き着く先が気がかりだ。私のように意気地のないつまらない人間にはまさかならないだろう。あなたのことをひどく得意に思っているうちに、愚か者に育てあげてしまったと思われるよなどと、お笑い申し上げなされて、「お齒黒もまだだから、特にこの御前で付けさせて下さい。今出かけて帰って来るまでこちらに置いていただきなさいよ」などと、こまごまと言ひ残しなされて、お出かけになったが、遺児若君はまるで女のようにで本当に愛らしく、いじってみたくなって、御眉作りなどは宣耀殿御自身でなさると、遺児若君はその御手を残らずなめまわしなさる。「これほどまでにいたずらをするのなら、もう関わりあいませんよ」と言って、大納言の君におさせになると、「もう女房にはさせま

い。宣耀殿御自身ではないのなら、泣くよ」と言って、大納言の手を押し
のけなさる。「奉公するのは慣れていないので、辛いわ」と言って、横に
おなりになると、「それでは、自分も寝よう」と言って、宣耀殿の御衣を
ひきのけて、御側にお休みになる。「一品宮の御側でも、このように振る
舞うの」とおっしゃると、「それから大将がいらっしやらない時は、この
ように寝ている」とおっしゃる。大納言の君が、「大将殿がいらっしやる
時は、どこでお休みになるのですか」と申し上げると、「大将は一品宮と
自分との間にお休みになるのだよ。一品宮の方にお向きになると自分が恨
むので、自分の方にお向きになるのだよ」などとおっしゃるので、人々が
笑い申し上げる。

【考察】

男君が遺児若君と宣耀殿女御を対面させる件は、

㊦(遺児若君ハ)ただ女のやうにてまことにうつくしう、(宣耀殿ガ遺児若君ヲ)
廻らまほしければ、(遺児若君ノ)御眉作りなどは(宣耀殿ガ)御手づからせ
させ給へば、(遺児若君ハ宣耀殿ノ)御手をばみなねぶりまはし給ふ。「かく
性なくは、今はいろはじ」とて、[㊧]大納言の君にさせ給へは「今はさせじ。
御づからせずは泣かんぞ」とて、[㊨]大納言の君の手をばへし除け給ふ。「宮仕ひ
もしならばで、苦し」とて、うち臥させ給へば、「さは、我も寝ん」とて、御
衣ひきやりて御側に寝給ふ。

とあり、傍線部㊦のように、遺児若君が大納言の君ではなく宣耀殿に眉作
りをしてもらいたいために、宣耀殿に対して積極的な態度を取るわけだが、
これ以前に太政大臣邸における梅見の宴でも同様な描写がなされている。

㊩「御賄ひを宮仕ひ初めにも、それや」と大臣の上(北の方)に聞こえ給へば、
(北の方ハ)居ざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将居直りて、色許りて[㊪]
見ゆる女房を、「こちや。いかが、さることは」と(男君ハ)のたまへど、
(北の方ハ)なほ押さへて奉り給うふを、「さらば、また」とて受け給ふほど
の(男君ノ)御気色、(北の方ハ)ただ死ぬばかりぞおぼえ給ふ。

とあるごとく、北の方が男君に積極的な振る舞いをするわけだが、それは
直前に太政大臣が北の方との間に生まれた姫君(小姫君)の世話を男君に
依頼したところ、「(小姫君ヲ)うち見やりきこえ給へる(男君ノ)匂ひ、有
様に、魂もやがて消え惑ふばかり、現し心もな」い状態に陥るほど、北の
方が男君を恋慕しているからこそ、㊩のように、北の方は積極的な態度に
出たのだ。その結果、

㊫酔ひ少し進みぬるまめ人(男君)の御心もいかがありけん。夕月夜の影はな
やかに差し入りて、梅の匂ひもかごとがましきに、姫君(小姫君)の御新枕
にはあらで、あやしの乱りがはしきや。

とあるごとく、男君と北の方との密通が成立する。一方、引用文㊦の二重
傍線部のごとく、遺児若君が宣耀殿の美しさを認識したからこそ、宣耀殿
の手をなめまわすという積極的な行動を取ったのであり、それは前述の男
君に対する北の方の行動の積極性と関連してくるはずだ。とすれば、遺児
若君と宣耀殿との間には密通の可能性が招来されてくるのではなからうか。
というのは、㊬には宣耀殿に対する態度が積極的な遺児若君と男君への
積極的な行動を取る北の方とが対応していると同時に、宣耀殿と北の方の
代替者は大納言の君と「色許りて見ゆる女房」であって、彼女たちも各々

対応しており、さらには㊶と㊷は「宮仕ひ」ということばで対応関係にあるからだ。すなわち、状況は異なるにせよ、㊶と㊷、㊸と㊹、㊺と㊻という三組の対応関係が成立し、そのうえ、㊼の直前に男君の遺児若君が仲澄のまねをするのではないかとする発言と相俟って、遺児若君と宣耀殿との密通が想定されるのではなからうか。

ところで、今まで述べてきたように、遺児若君と宣耀殿との間に密通の可能性は想定されるが、その可能性が現実性を帯びた場合には、男君と北の方との密通の二番煎じは否みがたく、新鮮味に欠けることにならう。とすれば、男君の主導によるとはいえず、遺児若君と男君の北の方一品宮との密通と出産、その後を生じる一品宮の死という一連の話筋が考案されたことが、読者に驚愕をもたらしたのではなからうか。この遺児若君と宣耀殿との密通の可能性が遺児若君と一品宮とのそれに転換されたところに、対読者意識がほの見えてくるのである。そのことは男君と小姫君との新枕ではなく、予想外にも北の方との密通が生じた点と軌を一にするのではないのか。だからこそ、本節の終わりに近い個所の『一品宮の御側にて、かく振る舞ふか』と(宣耀殿)のたまはすれば」以下の文章が、今後の作品の行方を物語っているのであって、前述した終わりの個所にわたる一連の文章の存在が重要なのだ。

三二 男主人公、遺児若君を溺愛

君も苦しくて、大殿籠り入りたるほどにぞ、大将は帰り参り給へる。
「あの御さま御覧ぜよ」と、人々聞こゆれば、「女の姿ならんほどは苦しからねど、もの忘れせざらんこそよしなけれ」とて、「こちや」と聞こえ給ふほどにぞ、女御も驚かせ給ひて、「あまりに人をあなづりてらうがはし

くはべり。とく具して帰り給へ」とのたまはすれば、いみじう笑ひ給ひて、「なにがしは幼くて、中宮をつくづくと見きこえたりけるにこそ、『行く末推し量らる』とて、長く御入り立ちは離れきこえたれ。この有様、春宮の御前にて人々学びきこえ給ふな。いかにも悪しく思さんぞ。されど、これは御同胞なれば。大臣は中宮にもさてこそおはすめれ。なにがしが一つ隔てある身になりて、もの狂ほしく、御子と同じほどなるものを、思し疑ふ上の御心こそけしからね。されど、げにすぐれ給ひなん人は、見ん人苦しかるべし」とて、うち見やりきこえ給へば、白き御衣どもにやや移ろひたる菊の御小桂奉りて、大殿籠り起きたれば、御髪は方々へ靡きかかりたるやうなる御まみのわたり、頬つきなど、なのめならずうつくしきに、「ただ今も春宮は、『御参りはいつぞいつぞ』と詰問はせ給ふ。果ては泣かせ給へるなんめり。あれがやうにももののおぼえたらんも、むつかしさも思ふことなく、我ほど心も静かによきことはなし」とのたまへば、中務の乳母、「その御代はりにはまた人が心を尽くして、暁も待たず帰らせ給ふなる面々の飽かぬ御名残に、病になり給ふ人もおはするとかや。我々はなかなか知りたてまつらぬことも、世の中には沙汰し申しはべるぞや」と聞こゆれば、「一人だにまだこそおぼえね、面々にさへ多からん偽りや」とて、うち笑ひ給へる、心恥づかしげなるものから、匂はしう懐かしき御さまぞ限りなきや。色濃き御直衣に、黄なる菊の御衣、紅の御単衣、千入に色深う見ゆるに、龍胆の織物の御指貫、花の枝ざしもなべて目慣れずぞ見ゆる。この君をうちも置かず、「いで、鉄漿つけたる口見ん。今少しをかしげにこそ見ゆれ。いづくにても久しうなれば、待ちやすらん、など心に離れぬこそ。これぞほだしなるべき。何事を振る舞ひたらんに、心づきなしと思ひてん。色好み立てて、思ひ寄らぬ隈なく振る舞へよ」など言ひ

る給へれば、「かく教へきこえさせ給はんに、まことに残ることあらじ。
*あまりなることはさてしも果てぬならひにて、御仲や悪しからん」など、
中務なかつかさ聞こゆれば、「さることあるまじ。心やうもまめやかに、まことしう
よき者にてはべるぞ。今御覽ぜよ」など愛し入りて、具し帰り給ひぬ。

【語釈】

*君―底本は「宮」とあるが、一品宮はこの場にはいないので、「君」の誤りと考える。「君」は遣児若君。*もの忘れせざらんこそよしなけれ―大人になっても宣耀殿女御に添い寝すること。辛島Aは「若君がやがて宣耀殿を恋の対象として意識し始めることを危惧する」と述べる。*この有様―遣児若君が宣耀殿に添い寝したこと。*これは御同胞なれば―遣児若君と宣耀殿とは対外的には姉弟だから、親しくしても異様ではない。*大臣は中宮にもさてこそおはすめれ―父関白は中宮とは兄妹だから、親しい関係でいらっしやるのだろう。*御子と同じほなるを―男君は帝の娘婿で、義理の息子になるから、子と同じである。*思し疑ふ―男君が中宮を恋慕していると、帝が疑う。*すぐれ給ひなん人―中宮のように美しい人。*見ん人苦しかるべし―夫としては他の男が邪恋をするのではないかと見張っていないなければならないので、気が休まらない。*うち見やりきこえ給へば―男君が宣耀殿の方を。*方々―あちらこちら。「片方」(片一方)と解する説(辛島A)もある。*御参りはいつぞいつぞ―宣耀殿が宮中に戻って来るのは。*あれがやうにもののおぼえたらんも、(我ほど心も静かによきことはなし―「あれ」とは春宮をさす。春宮のように、一人の女性だけに眼を向けていれば、その女性の動向が気になって煩わしさに悩ませられるが、自分にはそのようなことがなく、心が

平静であるから結構なことだという意か。*中務の乳母―宣耀殿付きの乳母か。*その御代はりにはまた人が心を尽くして―男君が心穏やかに日々を過ごしているのとは対照的に、女性が色々と気をもんで。*一人だにまだこそおぼえね、面々にさへ多からん偽りや―自分にはそのような女性はまだ一人も身に覚えがないのに、多くいるなんて、それは余りにもでたらめ過ぎる。辛島Aは『おもておもて』は、中務の乳母の『めんめのあかぬ御なごりに』の言葉じりをとらえて、意識的に言い換えたもの」という。*この君をうちも置かず―男君は遣児若君を放っておかないで。*待ちやすらん―遣児若君が男君の帰りを。*色好み立てて―「色、好み立てて」(女性経験を十分に積む)あるいは「色好み、立てて」(色好みを目指す)の二通りの解釈が考えられると辛島Aは述べる。*思ひ寄らぬ隈なく振る舞へよ―思い寄らないくらいの多くの女性たちに心を向けよ。*あまりなることはさてしも果てぬならひにて、御仲や悪しからん―遣児若君が女性の過剰なほどの興味を持つのならばそのままでは終わらないのが世の常のことだから、身近にいる一品宮に興味を抱くようになって、男君と一品宮との夫婦関係が悪くなるだろうという意。なお、辛島Aは「今後の展開に期待をもたせる効果が計算されていよう」と述べる。

【訳文】

遣児若君もくたびれて、お休みになった頃に、大将はお帰りになった。「あの御様子を御覧になって下さい」と、人々が申し上げると、「女の姿であった時は不都合ではなかったけれども、大人になってもこのようなことを忘れないのはよくないな」とおっしゃって、「こちらへいらっしやい」と申し上げなされた時に、女御も目をおさましになって、「ひどく人を馬

鹿にして無作法なのです。早く連れてお帰りになってほしいわ」とおっしゃるので、男君は大そうお笑いになって、「私は幼少の頃に、中宮をじっと拝見していると、『将来が思いやられる』ということ、長い間お出入りが遠ざけられ申して許されなかったのだ。この様子を春宮の御前で誰もお話し申し上げなさるな。大そう不快にお思になるだろう。遣児若宮と宣耀殿とは御姉弟だから、親しくしても異様ではない。関白は中宮と兄妹だから親しい関係でいらっしゃるのだろう。兄弟ではないゆえに、私一人だけが距離を置かれたような身の上となって、御子と同じ年齢であるのに、狂気じみて、私が中宮を恋慕しているとお思になって疑っていらっしゃる帝の御心こそ常軌を逸しているよ。しかし、なるほどすばらしく美しい人は、世話する夫の立場からすれば心配であるに違いない」と言っていて、宣耀殿に目を向け申し上げなされると、白い御衣どもに少し色あせた菊襲の御小桂をお召しになって、目をおさましになったばかりで、御髪はあちらこちらへ靡きかかって、御目もとのあたりや顔つきなどは、きわだって美しいので、「たった今も春宮は、『お帰りはいつか、いつか』と厳しくお尋ねになる。最後にはお泣きになるようだ。春宮のように一人の女性のことを心にとめてわずらわしいほどに悩むこともないから、私ほど心穏やかで快適なことはない」とおっしゃると、中務の乳母が、「その御代わりに他の女性が色々と気をもんでいるとか。あなたは女性のもとから暁を待たずにお帰りになるそうで、女性の一人一人は満ち足りぬ名残惜しさのために病気におなりになる方もいらっしゃるとか。御側にいる我々はかえって存じ上げないことも、世間ではうわさ申し上げているようですよ」と申し上げると、「私にとってそのような女性はまだ一人も身に覚えがないのに、めいめいというほど多くいるなんて、それはでたらめだよ」と言ってお

笑いになるのはすばらしくていらっしゃるものの、つややかで美しく親しみやすい御様子はこの上ない。色の濃い御直衣に、黄の菊襲の御衣、紅の御単衣が千人に色深く見える上に、龍胆の織物の御指貫は、花の枝ぶりもすべて新鮮に見える。男君は遣児若君を放って置かず、「さあ、お齒黒を付けた口を見よう。先ほどよりも少し美しく見えるよ。どこにいても時間が長く経つと、あなたが自分の帰りを待っているのだろうなどと気にならない時がなかった。これが絆というものだろう。あなたがどんなことをしかしたとしても、嫌だとは思おうか。色好みを目指して、考え及ばないくらい多くの女性たちに心を向けよ」とおっしゃっているので、「このようにお教え申し上げなされると、本当に遣児若君の毒牙にかからない女性はいないでしょう。余り度を越すことは、そのままでは終わらないのが世の常のことだから、一品宮との御夫婦仲にとって悪影響を及ぼすのでは」などと、中務が申し上げると、「そんなことはあるまい。遣児若君は性格もまじめで、実直ですぐれている者ですよ。さらに御覧になって下さい」などと溺愛している御様子で、連れてお帰りになった。

【考察】

男君が七、八歳で童殿上していた時に、父関白の妹で叔母に当たる中宮に対して、

⑥(男君が中宮ヲ)つくづくと目離れなくまもりきこえ給へりけるを、上(帝)の御覧じて、「心のつかんままに、誰がためもよしなし」とて、御入り立ちは放たれ給ひにけり。(巻一・二二節)

と語られており、⑥の内容が再度男君から宣耀殿女御に語られているのが

①の記事である。

①「なにがし（私云、男君）は幼くて、中宮をつくづくと見きこえたりけるにこそ、『行く末推し量らる』とて、長く御入り立ちは離れきこえたれ。……」とて、

（男君ガ宣耀殿ヲ）うち見やりきこえ給へば、……（卷一・三三節）

二つの傍線部の表現は類似しているわけだが、さらに、

②（遺児若君ノ）幼心地にも、女御（宣耀殿）の御さまの、日頃人にすぐれてうつくしう懐かしと見きこえつる宮（一品宮）よりも、なほ目もあやなるを、（遺児若君ハ宣耀殿ヲ）つくづくとまもりきこえ給ふを、……（卷一・三三節）

とある件が②①の傍線部と類似しているのを看過してはなるまい。というのは、②①は男君が中宮を、③は遺児若君が宣耀殿を凝視している点から、そこに恋慕の意味が内包されると同時に、特に①の波線部に表象されているごとく、密通の可能性が秘められているからだ。ちなみに、中宮と男君とは叔母と甥であり、宣耀殿と遺児若君との関係も実際は叔母と甥であるところから、両者の近似性を見るのである。

さらに、卷一の卷末近くで男君が遺児若君を溺愛する件は、

④（男君ハ）この君（遺児若君）をうちも置かず、「いで、鉄漿つけたる口見ん。

今少しをかしげにこそ見ゆれ。いづくにても久しうなれば、待ちやすらん、など心に離れぬこそ。これぞほだしなるべき。何事を振る舞ひたらんに、心づきなしと思ひてん。色好み立てて、思ひ寄らぬ限なく振る舞へよ」など（男君ガ遺児若君ニ）言ひみ給へれば、「かく教へきこえさせ給はんに、まことに残ることあらじ。あまりなることはさてしも果てぬならひにて、（男君ト

一品宮トノ）御仲や悪しからん」など、（宣耀殿付キノ乳母デアル）中務聞こゆれば、……（卷一・三三節）

とあり、男君にとって遺児若君は離れることのできない「ほだし」であると語られている。この傍線部「ほだし」なる語は、光源氏が雲林院で経文を学習して二条院に帰ることは面倒になったものの、「人ひとりの御こと思しやるがほだしなれば、寺にも御誦経いかめしうせさせ給」（賢木巻）うて、結局帰ることになる件においても用いられている。傍線部は光源氏が紫上を思慕する気持ちが続いて、それが障害となって雲林院に滞在できないと語られているのだ。とすれば、男君と遺児若君、光源氏と紫上という関係は切っても切れないものだと言われているのであって、遺児若君の造型と紫上のそれとの類似性を見るのである。

（未完）

（おおくら ひろし 本学名誉教授）